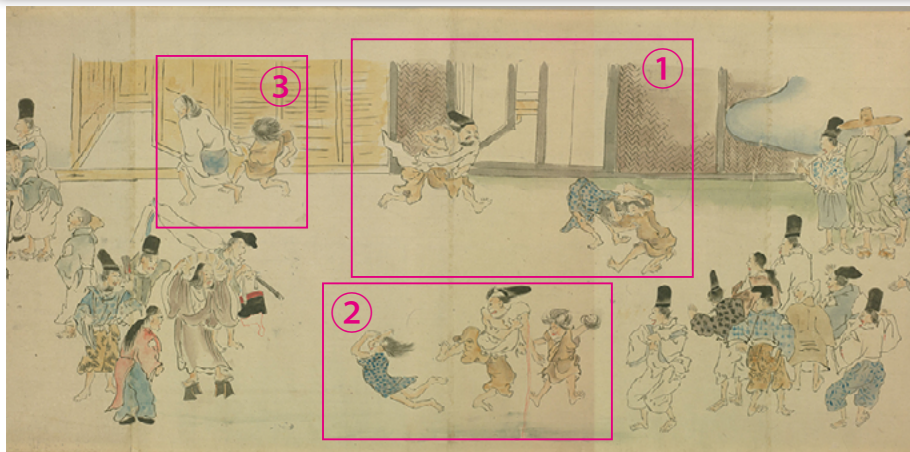


古代

第3章 古代国家の展開 3. 律令国家の転換 (2) 藤原北家と幼帝の誕生

おうてんもん  
応天門の変と因幡の豪族



『伴大納言絵巻』(国立国会図書館デジタルコレクション) 中巻

『書き下し文』  
『日本三代実録』貞観八年八月三日条  
左京の人・備中権史生大初位下・大宅首  
鷹取、「大納言伴宿禰善男、右衛門佐伴宿  
禰中庸等、同じく謀りて火をつけ、応天門  
を焼く」と告げき。  
同八年十月二十五日条  
(前略) 越前国足羽郡の人・生江恒山、因  
幡国巨濃郡の人・占部田主等、備中権史生・  
大宅鷹取を毆傷し、あわせて鷹取の女子を  
毆殺しき。恒山等言はく、「私の主、右衛  
門佐伴宿禰中庸の教に随ひて、鷹取の女子  
を毆殺しき」と(後略)。



解説

資料画像は『伴大納言絵巻』の一部で、**応天門**の焼失が**大納言**の**伴善男**の放火であったことが発覚するきっかけとなった**子ども**のケンカを描いた場面である。画面には、次の①～③の場面が**異時同図法**\*によって描かれている。

- ①子ども同士がケンカしている。右側の無地の着物の子どもの父親(父1)が、画面左側から走ってくる。
- ②父1は二人をひきはなし、ケンカ相手の子どもを蹴飛ばした。
- ③無地の着物の子どもは、母親に連れられて帰って行く。

絵巻の詞書によると、この場面の後、伴善男の家人である父1が「大納言様がいる限り、おれが何をしようとおのお咎めもないさ」と言ったところ、蹴飛ばされた子どもの父親(父2)は「おれが口を開いて大納言の秘密をばらせば、大納言はただではすまないのだぞ」と答えた。この後、父2は取り調べを受け、伴善男が放火するのを目撃したと証言した。

実際の事件の真相発覚の経緯は、この絵巻とは異なる。『日本三代実録』によると、「伴善男・中庸の父子が**応天門**に放火した」との**大宅鷹取**による告発があり、その後、鷹取への暴行並びにその娘を殺害した件で、伴中庸の従者である生江恒山らへの訊問が行われた。恒山らは「放火は中庸がおこなった」と証言したが、父の善男が命じたものと判断され、善男父子、鷹取の娘を殺害した恒山と占部田主(因幡国巨濃郡(現在の鳥取市の一部と岩美町)出身)らは遠流となった。(なお、娘を殺されたため鷹取が訴えたのか、訴えられた報復として恒山らが鷹取親子を襲ったのかは不明)。

絵巻の物語が史実を反映しているとする、他人の子どもを虐待する父1のモデルの一人は、因幡出身の占部田主ということになろう。彼も、藤原種継暗殺の実行犯となった**伯耆桴麻呂**と同じく、都の貴族との関係を深めることによって、地元での一族の勢力を伸ばそうとしていたものと考えられる。

\*異時同図法…物語の展開を担う主人公を、同一の構図の中に複数回登場させる技法。時間の推移を表現するために用いられる。

(担当：石田敏紀)

参考資料

- ・鳥取県『鳥取県史 1 原始・古代』(1972年) (とっとりデジタルコレクション)
- ・神谷正昌『清和天皇』(吉川弘文館 人物叢書 2020年)